

う。尤も或る人々はクラプロートやラクーペリー (Lacouperie) の抱いて居つた古い考、もしくはそれを承け繼いだ人々の説をそのままに引張つて來て、吐魯番即ち、昔の車師といふのは後の回鶻であると考へ、回鶻人は古くから吐魯番地方に居つたもので、従つて回鶻文字も回鶻語も九世紀の後半以前より此の地方に存在したものとして差支ないと主張するかも知れないが、かゝる説に對して自分の答ふべき所は、此等クラプロート氏以下前世紀の學者の説を盲目的に信ずる前に、先づ其の所論の根據を精細に検討すべきであるといふに止めたい。それで自分は回鶻文字で書いてあるものをすべて回鶻語と見ることに到底賛成するを得ないが、それでは之を何と見るべきであるか。更に進んで之に對する管見を述べて見よう。

一九〇八年にミューラー氏の譯出した回鶻字回鶻語と稱せらるゝ金光明經の奥書<sup>34</sup>には、此の經が印度の語からタヴグハチュ (tavjac) 即ち支那<sup>35</sup>の語に譯され、別失八里<sup>ビシユバリク</sup>の *singu sali tutung* が、支那の語から更に Türk の語に譯した旨が記され、また一九〇七年同氏によりて發表せられた同種の彌勒下生經の奥書<sup>36</sup>には、之が印度の語から吐火羅<sup>トカラ</sup>の語に、吐火羅の語から Türk の語に譯された旨が見え、更に同氏が一九一八年に發表した *Dasakarma-buddha-avadānamālā* の奥書<sup>37</sup>には、これが Kuisan (Kisān) (貴霜) の語から吐火羅の語に、吐火羅の語から Türk の語に譯されたことが見えて居る。此等の奥書を有する經は、その文字體裁の上から見ると、一般に唐代のものと考へられ、ラドロフ氏の八世紀のものとする類の中のものであつて後世の版本や、また草體に成つた文書寫經等とは全くその體裁を異にして居る。さてミューラー氏はこゝに「Türk の語に譯した」と記してあるのを「回鶻文に